

文章中の-----は、「国語デジタル教科書」に収録されている資料や機能です。



日常の指導に役立つ機能やツール

— 国語の授業をより充実させるために —

これまで五回にわたり、指導者用「国語デジタル教科書」（以下、デジタル教科書）の効果的な活用について連載してきました。最終回の今回は漢字指導など、日常の国語の授業の中での活用方法や、特定の教材だけでなく、汎用的に使えるツールの活用方法についても紹介します。年間を通じて、計画的にデジタル教科書を活用していくことを視野に入れながら、国語の授業の充実を図っていきましょう。



1974年生まれ。広告代理店勤務を経験した後、公立小学校教諭に。横浜市小学校国語研究会を中心に、市内の国語教育推進に取り組む。

デジタル教科書の活用場面① 「フラッシュカード」機能 で漢字学習の定着を!

デジタル教科書の各教材の中には、「漢字」というタブがあり、選択すると、その教材で学習する「新出漢字一覧」が表示されます。アニメーションでその漢字の筆順を確認したり、「フラッシュカード」機能を使って漢字の学習を楽しんだりすることができます（※1）。

漢字の筆順の確認では、子どもたちに画面を見ながら空書きをさせ、教師は子どもたちの様子をじっくり観察することができます。間違いやすい筆順のところ

に印を付け、何画面かを予想してから、空書きをする方法もあります。

フラッシュカードは、漢字学習の定着を図るために効果的です。学習する「範囲」や「学習のしかた」、「順番」、「めくり方」、「リズム音」を選ぶと、ゲーム感覚で学習を楽しむことができます。テストの前や学期のまとめの時期に、定着状況を自覚させるのに効果的です。

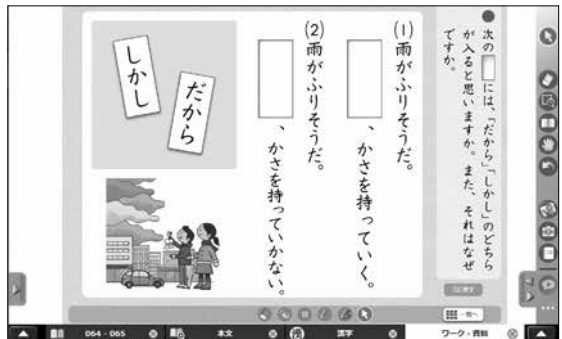
これらの機能は、漢字学習を苦手とする子どもにとって、視覚的に漢字の形や筆順を捉えたり、繰り返し漢字の読みや使い方を確認したりすることができ、漢字学習に対する意欲を高めます。



※1 フラッシュカード機能を使って漢字学習ができる「漢字読みカード」の画面。取り上げる漢字をカスタマイズでき、ゲーム感覚で漢字を定着させていくことができる。

デジタル教科書の活用場面② 「ワーク」機能で 言葉の力をアップ!

いわゆる言語事項を扱う教材では、豊富な「ワーク」機能が役に立ちます。例えば、「文と文をつなぐ言葉」（四年下）では、教科書に掲載されているものと同じ問題がワークとして用意されているので（※2）、適切なつなぎ言葉を画面上で子どもたちと考えたり、あえて間違ったつなぎ言葉を当てはめてみたりすること、順接や逆接の意味を、子どもたちの



※2 「文と文をつなぐ言葉」（4年下）のワーク。画面上のカードを動かしながら、クラス全員で考えていくことができる。

デジタル教科書の活用場面③ 「朗読」・「挿絵並べ替え」 機能で効果的な導入を!

言葉で引き出すことが期待できます。

また、教科書の問題だけではなく、類題も用意されているので、練習問題として活用することができます。さらに、教科書の問題や類題は、それぞれPDFファイルで用意されているので、プリントとして配布することができます。プリントを使って自力で解決した後に、デジタル教科書の画面上で正しい答えや言葉の使い方や意味を共有すると効果的です。

じいさんとガン」（五年）、「やまなし」（六年）など、教材によっては、二人の読み手から選べるものもあります。子どもたちがある程度読みを深めた後に、二つの朗読を聞き比べ、自分がイメージした物語の世界観と近い朗読はどちらかについて、話し合うことができます。ある一つの言葉や文を取り上げ、自分の解釈に近い朗読はどちらかについて話し合うことで、さらに子どもたちの読みが深まった事例もありました。

低学年の物語文に収録されている「挿絵並べ替え」機能（※3）は、物語の構



※3 「くじらぐも」（1年下）の挿絵並べ替え画面。挿絵を並べ替えながら、物語の構成を確認していくことができる。

造と内容の把握をする際に有効です。場面の様子や登場人物の行動などを考えながら、内容の大体を捉える際に、挿絵を並べ替えながら共有をしていくことができます。

一年では、「ワーク・資料」の中に、「スライドショー」機能や「アニメーション」機能を搭載している教材があります。物語の精査・解釈の段階に至るには、構造や内容の把握が不可欠です。朗読を聞くだけではなく、紙芝居やアニメーションのように、視覚的にも物語の世界を提示することによって、物語を読むことを苦手としている子どもにとっても、全体像が捉えやすくなります。ぜひ効果的に活用していただきたいと思います。

**デジタル教科書の活用場面④
思考ツールを使って、
書く事柄を決める！**

「書くこと」の学習では、新聞を書いたり、報告文や意見文などを書いたりする言語活動を行う際、題材の設定や情報の収集、内容の検討、構成の検討などの場面で、「道具箱」にある思考ツールを活用したり、「ワーク」機能を活用したりすることで、子どもたちの思考操作を

文章のどこに書けばよいか、例を挙げて説明する文章の構成をどうしたらよいかなどについて、例文をもとに、視覚的に捉えることができます。この教材に限らず、「書くこと」の教材には、構成を視覚的に捉え、スムーズに記述へとつなげることを支援するワークが収録されています。

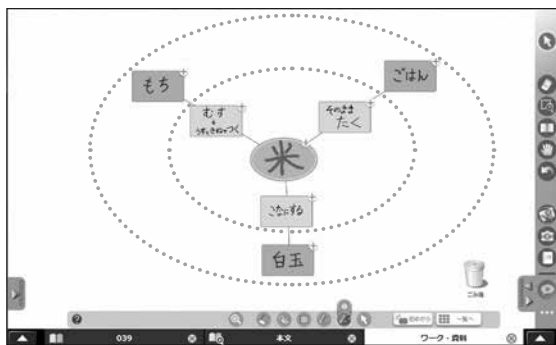
**デジタル教科書の活用場面⑤
動画を効果的に活用し
て、モデルを共有！**

「話すこと・聞くこと」では、「ワーク・資料」にある、動画がとても役に立ちます。導入場面で、どんな発表や話し合いをするのかなどについて、動画を通して具体的にイメージできることで、子どもたちは単元全体の見通しをもつことができます。

例えば、「学級討論会をしよう」(六年)では、「立場を明確にして主張し合い、考えを広げる討論をしましょう」という学級討論会の動画(※6)が収録されています。これによって実際の討論会の様子を共有することができるとともに、解説の有無を選べるので、子どもたちに示す情報を限定しながら動画を活用するこ

支援することができます。

例えば、「食べ物のひみつを教えます」(三年下)では、「すがたをかえる大豆」の学習を生かして、姿を変えて食品になる材料について調べ、例を挙げて説明する文章を書きます。調べた材料、食べる工夫、食品について整理する際、物事の関係を図で整理していきます。そのときに、「道具箱」にある思考ツールを活用します。「道具箱」には、「マップ」(※4)や「グループカード」などの思考操作を支援する機能があります。子どもたち一人一人が実際に使うのは、プリントした



▲※4 思考ツールの一つ「マップ」。あらかじめ用意された付箋などを使って、思考を視覚化していくことができる。

とができます。話し合いのしかただけではなく、インタビュアーやスピーチのしかたなど、モデルとなる動画がそれぞれの教材に収められているので、さまざまな場面で活用することができます。ただし、動画を見せれば、子どもたちは話し方や聞き方が理解できるようになるというわけではありません。教師の意図や目的を明確にし、単元や授業のどの場面で動画を見せるのか、動画を見せるのは全部かそれとも一部かなど、見せ方を工夫することが大切です。



▲※6 「学習討論会をしよう」(6年)に収録された動画。解説の有無を学習状況に応じて選択できる。

ワークシートや紙の付箋ですが、個人の思考の過程を全体で共有するときに、これらの機能が役に立ちます。

「食べ物のひみつを教えます」では、「マップ」を使って、関連することを線でつないでいきます。一つのキーワードからアイデアを広げたり、物事の関係を図で整理したりする様子を、全体の場と一緒に確認することで、子どもたちは活動のイメージをもつことができます。また、「ワーク」機能(※5)は、文章の構成を検討するのに役立ちます。自分が調べた「材料」や「食べる工夫」を、



▲※5 「食べ物のひみつを教えます」(3年下)のワーク。文章構成を考えると、「ワーク」を利用すると便利。

デジタル教科書を活用して

デジタル教科書の効果的な活用のしかたについて連載してきましたが、紹介した方法以外にも、まだまだ多くの活用事例が考えられると思います。デジタル教科書の機能には限りがありますが、目の前の子どもたちに合わせた活用方法は、無数に考えられるのではないのでしょうか。ただ、紹介した活用方法を、そのままそれぞれの教室に取り入れても、同じような効果が得られるとは限りません。子どもたちの言語能力や興味関心に応じて、方法をアレンジする必要があるからです。また、デジタル教科書を導入したからといって、国語の授業が急に変わるわけではありません。便利なツールをどう使いこなすか、そのためには、子どもたちの実態を分析したうえで、子どもたちどんな力をつけたいのかを明確にしておく必要があります。そして、子どもたちに必要な手立てを考えていく中で、デジタル教科書の特性を生かした効果的な活用場面を考えていくことが大切です。デジタル教科書や板書、他の教具など、それぞれの特徴を把握し、それぞれを効果的に使い分けながら、子どもたちにとってよりよい手立てを講じていくことが重要です。授業改善の一つのツールとして活用していくとよいと思います。